

## § 1. はじめに

平成3年(1991)に発足し12年間にわたって活動してきた本部会もようやく解散となる。本報告書は当部会最後の報告書であり、盛り沢山の内容となった。

従来からの「歴史的鋼橋を訪ねて」シリーズに加えて、発足当時から暖めてきた「リベット橋ができるまで」と「橋梁製作メーカーの歴史」をまとめた。

「§3.歴史的鋼橋を訪ねて」は都内の8橋を取り上げているが、回を重ねるごとに内容が充実している。出来るだけ原点にさかのぼっての資料調査と現橋調査を踏まえていることは言うまでもないが、橋梁技術者ならでの視点で、オリジナルの図面・写真を使用して、ここが知りたいというツボの解説にも力を入れている。また、その橋の見どころを写真とともに述べているが、これは長年のうちに備わってしまった橋梁ファン気質の発露である。さらに、「§4.海幸橋について」は、前報告書で一度取り上げ土木史研究発表会でも発表した海幸橋について、その後撤去されたこと、新資料が発見されたことを踏まえて前報告を改訂したものである。

「§5.リベット橋ができるまで」は、当部会発足当初に勉強した橋梁技術の歴史のうち、製作部門を改めて取り上げたものである。これは、設計や架設と違って、製作については既往の年表や文献にほとんど出てこないからである。しかし取り組んでは見たものの、歴史としてまとめるには資料不足に加えてわれわれでは力不足であることを認めざるをえなかった。そこで、すでに歴史的な製法となってしまうリベット接合による橋梁製作のプロセスを、今の若い技術者に理解していただけるよう、写真や図を多用して解説することにしたものである。

「§7.橋梁製作メーカーの歴史」は、明治から現代に至るわが国の鋼橋製作メーカーを通覧できる資料としてとりまとめたものであり、おそらくわが国でははじめての試みではないかと思う。歴史的鋼橋を調べていると、橋歴板に現在は存在しない製作所名が記してあるものにしばしば遭遇する。製作所には消長があり、製作所名には変遷がある。それを調べるときに便利なレファレンス資料であり、眺めても楽しいように工夫してある。

「§6.保存橋梁の調査」は、各地に歴史的な鋼橋がさまざまな形で保存される事例が増えてきたので、保存橋梁の実態調査結果の概要をまとめたものである。現地調査をしていないものの方が多く、ごくあらましに留まったのは残念である。

12年間の歩みを「§2.活動概要」で振り返ってみると、当初、橋梁技術史年表の作成をしながらの勉強会で始めた。橋梁事故についても勉強したが、レポートを出すには至らなかった。文献資料の勉強と実地に古い橋に接することを組み合わせて、古い橋を見る目を養おう、という活動は、「歴史的鋼橋を訪ねて」というシリーズになり、年を追うごとに充実していったことは前述のとおりである。

ご期待の何分の一にもお応えできなかったことと思うが、歩みの鈍い亀のようであった本

部会を、設立当初より忍耐強く暖かく見守りご指導くださった、伊藤學會長、阿部英彦技術委員長・顧問には心より感謝したい。同様に倉西茂顧問、歴代の技術委員会各位、幹事会各位にも感謝したい。

長い年月の間に、部会員の清水 進 氏（三菱重工業）、倉持建三氏（駒井鉄工）のお二人がお亡くなりになった。ご冥福をお祈りするとともに、本報告書をささげたい。

交代された方を入れると、実に多くの部会員が参加してくださった。感謝したい。とりわけ、実質的に部会に出席し、報告書の執筆に携わってくださった方々には幾重にも感謝したい。最後に本報告書は、掘井滋則幹事長の献身的な編集作業なしには実現しなかったことを記して満腔の謝意をささげるものである。

平成 15 年（2003）3 月

鋼橋の技術史研究部会  
部会長 小西 純一